
日本はきもの博物館収蔵資料紹介

～18世紀末から19世紀前半の靴～

日本はきもの博物館学芸員（非常勤） 市 田 京 子

はじめに

ここでは、日本はきもの博物館（広島県福山市）に所蔵されている欧米のシュー・ファッションの歴史を伝える資料を紹介させていただいており、今回はその資料441点から、19世紀前半の靴を取り上げる。

フランス革命からナポレオン帝政、王政復古、産業革命と市民階級の台頭など目まぐるしく変化したこの時期、ファッションも大きく変わり、豪華で装飾性豊かだったものから古典的なシンプルさが求められるようになった。その影響は当然ながら靴にもあらわれている。古代ギリシアのサンダルにならったという、リボンテープを足首に巻いたシンプルなフラット・シューズは、トウ・シューズを思わせるものであった。

なお、掲載する写真は全て日本はきもの博物館所蔵である。

1. 19世紀前半の靴の特徴

ヒールのないフラット・シューズであるこの時期の靴は、イギリスのJune Swann氏によると、爪先の形で変化が捉えられるという。1829年までは小さな丸みのある爪先で、30年に真四角になり、44年頃からそのコーナーに丸みがつくようになるとされている。また、25年までは2センチ程のスプリング・ヒールがみられるが、その後51年まではみられず、52年になると再びヒールが登場するという。

博物館所蔵の靴にはややずれるものもあ

るようにみえるが、前159号では、小さなラウンド・トウのものを「19世紀初頭」としてご紹介した。今回は1830～50年頃のスクエア・トウとなってからの靴を「19世紀前半」として取り上げている。

この時期、女性用にフィット性のあるブーツも出てくるが、靴の構造的にはまだ大きな変化はない。底は外を硬めにした2枚の革を重ねただけで、その上に薄い布か革を敷いてあり、踵の補強もほとんどない。左右の別もまだみられないが、底革の縫い合わせの糸を隠す切り目はなくなり、縫い糸は外からは見えなくなっている。

甲の素材には、豪華なダマスクやブローケードはみられなくなり、基本的に単色のシルク・サテンが多く、革の使用が増えてくる。装飾には手仕事風の刺繍が多くみられる。裏打ちとの間には薄い革がはさまれるが、強固な芯とはなっていない。履き口は細いリボンテープで縁取り、その中には細紐が通してある。留め具のない履き口の緩みを押さえたとみられる。

2. 19世紀前半の浅靴

写真1はブラックのシルク・サテンで、小さなリボン飾りがつく。甲の覆いは深めで、四角な爪先は隅の丸くなるタイプである。足首に巻くシルクのテープが付く。

ラベル「Fournisseur de la Maison Royale de Hanovre MEIER Cordonnier pour Dames 17, rue Tronchet Paris Pres



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

la Madeleine」

フランス。長24.0×幅5.3×高4.6cm。

写真2はアイボリーのシルク・サテンで、同材のロゼッタ飾りが付く。履き口の縁取りには細い木綿の撚り紐が通され、足首に巻くテープは伸縮性がある。

フランス。長23.3×幅7.1×高4.2cm。

写真3はブラック・レザーで、ブラウンのシルクテープの縁取り、同材の足首に巻くテープが付く。

フランス。長22.9×幅6.3×高5.0cm。

写真4はアイボリーのシルク・サテンで、同色のシルクテープを貼ったストライプと小さな花飾りがある。この靴は、1840年イギリスのヴィクトリア女王が結婚式に履いたものと同じデザインである。

イギリス。長23.3×幅6.0×高4.6cm。

この4点は、いわばフォーマルな靴の典型的なものと思われるが、写真5はやや雰囲気異なっている。濃いベージュのシルクとレザーを組み合わせ、深い甲は3穴をあけてシルクテープを通してある。この靴には由来書があり、1844年1月10日、アメリカのマサチューセッツ州リンで、Mialma R. Kenyonsという人が結婚式に履いたものとされている。作られたのもリンである。カジュアルな印象があるが、アメリカ独自のスタイルだったのだろうか。

アメリカ。長24.5×幅7.2×高5.6cm。

靴のスタイルはシンプルであったが、刺繍による装飾が多くみられる。写真6・7は、織りは違うが、アイボリー・シルクに絹糸で花をモチーフに刺繍したもので、6にはアイボリー、7には濃いピンクのシルクのキルティングした裏打ちがあり、同じ材の髪飾りも付く。寝室用のスリッパと思われる。



写真6



写真7



写真8



写真9

写真6 / イギリス。長24.4×幅6.9×高5.8cm。写真7 / フランス。長23.9×幅6.5×高5.8cm。

写真8はウール地に色鮮やかなプチボワンと呼ばれる刺繍をほどこしたもので、このモチーフはヴィクトリア女王の夫君にちなむ「アルバート・スタイル」の名があるという。縁取りは黒ビロードで、裏打ちは白い革である。ラベル「BROWN AND SON Ladies & Gentlemen's Boot & Shoe



写真10



写真11

Makers Church Street SHEFFIELD」

イギリス。長25.3×幅7.3×高5.5cm。

写真9は、1760年頃のシルク・ブロードを用いたものである。裏打ちはピンクのシルクのキルティングで、同じシルクの縁取りとロゼッタがつく。

長26.0×幅6.7×高5.2cm。

写真10は、麻糸と思われるベージュの糸をクロセ編みにしたもので、裏打ちの革は後半部で二枚重ねにして補強してある。縫い糸が見える箇所もあり、底革は切り込みを入れて縫い合わせてある。18世紀にみられた方法で、この時期にはめずらしい。

長23.7×幅6.0×高4.3cm。

写真11は黒エナメル革のもので、中央部にはシャーリングした革をはさんで伸縮性をつけてある。裏打ちも革で、内底には赤い革が敷かれている。黒革の外底には爪先部と踵部に別の革が重ねられ、しっかりし



写真12



写真14



写真13

た作りになっている。Swann氏によると、この靴はオーバーシューズ「ガロッシュ」であるといい、この時期の華奢な靴の外歩きに用いられたようである。

イタリアか。長25.7×幅7.2×高4.2cm。

3. 19世紀前半のブーツ

女性用となるファッション性の高いブーツ、足首あたりまでの深靴、は、1820年代の終り頃に出てくる。パリの服飾博物館にはナポレオンの皇后ジョゼフィーヌのブーツが残されているという。

写真12はアイボリーのシルク・サテンのブーツである。甲部中央付近で縫い合わせてあり、前の開口部には同材の舌革が縫い留めてある。留め具も同じシルクのリボンテープであり、裏打ちは白いフランネルと、フィット性は低く柔らかいものである。

フランス。長24.5×幅6.3×高12.0cm。

写真13はアイボリーの小山羊革のもので、脇で編み上げて留めるためフィット性は高くなっている。編み上げには細い撚り糸状の紐が残されている。裏打ちは白木綿である。

イギリス。長25.9×幅6.6×高11.5cm。

写真14はタフタ地のようなブラウン・シルクのもので、爪先部と踵下部に黒い革が組み合わせてある。やはり脇の編み上げで、紐はシルクテープが通してあり、先端は柔らかい金属で巻かれている。

長24.9×幅5.9×高12.8cm。

13・14とも靴底には左右の別はほとんどないのだが、僅かな違いなどからみると、編み上げは内側になっている。外側のほうが留め易いと思われるが、見えないようにと配慮したのであろうか。

おわりに

この時期の靴は、「室内履きでは？」とたずねられることが多い。ただヒールが消えただけで、シューズがスリッパに見えてしまうのかなと思ったりもする。この後、ヒールが姿を現し、靴がしっかりした構造をもつようになると、このタイプの靴はスリッパとなって残るのだろう。

今回は19世紀を中心に男性の靴などを紹介する。

～19世紀前半の靴～

—日本はきもの博物館所蔵—



1840年頃の靴。
ヨーロッパのために北アフリカで作られた靴。使用地はフランス。ベージュに花柄モチーフのつづれ織りのようなシルクに金色ブレードの縁取り。パープルのリボンはアニリン染料で染めたもので、50年代か。同じような織り地のポーチが付く。
長24.2×幅7.2×高4.9cm。

1850年頃の靴。
アメリカ。ブロンズ・カラーの革にカットワークとチェーンステッチの装飾。カットワークにはオリーブ・シルクをあてる。
ブロンズ・カラーは1845年に登場したという。
長25.0×幅6.1×高5.2cm。



1840年頃のブーツ。
黄色シルクと革を合わせたレースアップ・ブーツ。裏打ちは白いシルク、内底は白革敷き。濃いワインレッドのフリンジ。フロント・レザーやフリンジは1830年頃から流行。底革に僅かな左右の別があり、はと目は内側になる。積み革のヒール。
長24.3×幅5.8×全高13.6cm、ヒール高1.9cm。